

特集「長信⇄短信」

佐藤博之 私事で恐縮だが、昨夏に未来短歌会の西村曜と結婚した。結社の違ひはあれ、歌を詠む者同士の夫婦といふことで、短歌についても大きな刺激を得ながら楽しく暮らしてゐる。

歌を詠む妻にまづ感謝してゐるのは、身近に歌について相談できる人があるからだ。歌会に出す歌でも「心の花」などに投稿する歌にアドヴァイスをもらつたり、掲載された歌に批評や感想をもらへるのはとても有難い。夕食時などの話題に短歌や歌人の話も多い。共通の歌友にも恵まれてゐることから、一緒に出かける用事もしばしばあり、結婚式の二次会には乾杯の挨拶をお願ひした月丘ナイルさんをはじめ、多くの歌友が集まつてくれた。結婚して本棚の歌

集や歌書は倍増し、毎月の「心の花」に加へて「未来」も読むことができる。また、歌集出版やそれにまつはることを近くで見られたことも大変勉強になつた。そもそも歌会や全国大会への参加に、大きな理解があることからして非常に恵まれてゐるのではないだらうかと常々思つてゐる。

そして何より妻を歌に詠む中で、妻に後で読まれることを意識することが私の中で大きな楽しみになつてゐる。普段なかなか直接言ふことができない妻への気持ちに歌にして伝へられることは、短歌を詠む上で最高の喜びだと感じてゐる。正直これまでは相聞歌に苦手意識を感じてゐたが、今は相聞歌を詠むこと、ひいては特定の相手に伝へることを第一に考へて

短歌を詠むことが、今の私の大きな課題であり悦びである。

ともども未熟な夫婦ではあるが、切磋琢磨しながらこれからも妻とともに頑張つていきたい。

・ともすれば絵本のくまの名にも似てあんがい軽い響きだ 夫婦

西村曜

「未来」二〇一八年十二月号

笹本碧 二十代のころ、千葉から高田馬場まで通勤していたことがあつた。京成本線を使い日暮里で乗り換えるルートで、この途中に好きな場所があり、そこを通るのが毎日のささやかな楽しみになつていた。

その場所とは、「京成線青砥駅の下りホーム」である。ここは普通の駅のホームとはちよつと違う。青砥駅は京成本線と押上線が乗り入れており、重要な乗換駅の役割を果たしている。ホームは全部で四本あるのだが、地上に並ぶのではなく、階層構造になつてゐるのだ。一階は入り口、二階は上りホーム、三階は下りホーム。外から見

ると、青砥駅はちよつとしたビルくらいの存在感がある。周辺にあまり高い建物がないこともあり、その一番上の下りホームは眺めの良い知られざるスポットなのだ。

さらにそのホームの千葉方面側の端までゆくと、屋根もなくかなり広い眺望を得ることができる。

近くには中川と新中川があつて空間が広く、その向こうに立ち並ぶ建物群もよく見える。夜はまた格別だ。灯りがともるマンシヨンの夜景が並び、近くの首都高速の街灯も彩りをそえる。そして走り去つてゆく電車の明かりの、なんと美しいこと。帰宅するときはこの駅で乗換が必要だつたのだが、わざわざ一本電車を見送つて、それをホームの端から眺めていたこともあつた。

もうそのルートで通勤することはなくなつてしまつたが、毎日の通勤途中にそのような場所があつたのは、とても幸せなことだつたなと今思う。